

平成 18 年 7 月 6 日

「モンゴル国子ども達の発達を支援する指導法改善プロジェクト」業務報告書

～ モンゴル側の指導書作成計画への評価と助言 ～

篠原文陽児（担当科目：IT 教育）

1. 出張期間 平成 18 年 6 月 17 日（土）～同年 6 月 25 日（日）
2. 目的 事前調査結果等に基づき、現地関係者とカウンターパート及びワーキンググループメンバーと面談及び協議し、指導書作成年次、単元、対象学年、作成担当者等から成る指導書作成年次計画案と指導書の構成案及び研修生受入等の決定を支援する。また、「勉強会」において、指導書作成に資する講義と質疑応答を行う。
3. 日程及び面談者等（別紙）
4. 成果

(1) 指導書作成年次計画案

年次(期限)	単元	対象学年	指導書作成担当者及び責任者	作成協力者
第 1 年次 (～2007. 7)	情報	第 5、6 年生	Ms. Lkhagrasuren MUNKHTUYA Mr. CHOIJOO	S. Zagdal 他 6 名(第 45、97、Setgemj 学校各 1 名を含む)
第 2 年次 (～2008. 7)	情報	第 7、8 年生	Ms. Lkhagrasuren MUNKHTUYA Mr. CHOIJOO	
第 3 年次 (～2009. 7)	情報	第 9 年生	Ms. Lkhagrasuren MUNKHTUYA Mr. CHOIJOO	

(2) 指導書の構成案

①前書き、②本書の目的と読者対象、③IT 教育の意義と目的、④IT 教育の目標と内容（概要）、⑤IT 教育指導法理論、⑥IT 教育のカリキュラム案（「情報領域」）、⑦指導案（コンピュータがある場合と無い場合の 2 種類とし、他教科・他領域との関連、教材・設備、形成的及び総括的評価を含む）、⑧附属資料（ワークシート、インタビューを含む実施結果と評価、CD）、⑨謝辞、⑩奥付

なお、研修生受入に関し、実際に指導書を執筆する者を優先することになった。

(3) 勉強会における講演内容（要旨）

本プロジェクトの成果である「児童生徒中心の授業の実現」つまり、「児童生徒中心の教育課程」を編成し、その具体として「児童生徒が楽しく、ワクワクする」授業を実現するための方法は、ひとえに教師自身が自身と児童生徒に関わる日常の経験に興味と関心を示し日々好奇心旺盛な生活をおくることに努め、そうして感じ得た経験を豊かで驚きのある「ドラえもののポケット」のように日々蓄えておくことである。そして、教育と授業の目標に照らし、これらの中から適切な話題を引き出し構成し直し演出する「語り部」として、授業の導入部分に先ず挿入することである。特に、授業の「初発問」には、児童生徒にとって身近な日常の事象、モンゴルの歴史、自然、先人の智慧、文化を包含する好奇心と疑問を誘発させる具体的な事例が重要であることを、具体例によって示した。また、特に目標については、Bloom の「目標分類学」に、授業評価については、Flanders や OSIA など授業分析の技能も、教師にとって重要であることを指摘した。

(4) その他

滞在期間中公私にわたり通訳の任に当たった職員（IT 教育関係では、Ms. Bayaruma、Ms. Bogiima）は、有能であり、高い賞賛を禁じえない、

5. 提言

今般の打合せと協議等を通じ、カウンターパートはじめワーキンググループ諸氏の問題意識の高さと深さ及び課題への積極的な取り組みの態度に触れることができ、筆者との関係も深まりつつあり、今後の実り多い成果が期待される。

こうした期待にいつそう応える方策は、（１）世界的規模での懸案事項である他教科での IT 活用（ICT-Pedagogy Integration）を強く示唆する指導書欄外項目「トピックス」（案）の挿入の検討、（２）誤解を恐れずに敢えて指摘すれば、狭い指導書作成支援にとどまることなく、世界各国で行われている教育改革の中での「モンゴル国特有」の教育改革に寄与する姿勢を持ち続けたいこと、（３）カウンターパートとの情報交換をいつそう密に効果的にするため彼らとの電子メール活用システムの供与と指導書作成等にかかる課題解決を継続的に支援する「IT 教育サポートセンター」（仮称）の設置及び「初発問データベース」（仮称）の構築、（４）今般企画され開催された勉強会を、特に、具体的な教授学習目標の設定と明細化及び教授スキルの向上に力点を置き継続的かつ計画的に実施することである。また、（５）大学初年級と職業教育及びモンゴル国の特色ある遊牧民への教育の充実と普及などを視野に入れ、教授学習目標と教授行動及び学習者の変容の側面で優れた授業を観察する機会の提供と、同じくビデオ映像等による自主的な研修を支援する機材等の充実を含む、ノンフォーマル及びインフォーマル教育センターなどとの連携を視野に入れながらの環境整備が求められよう。

さらに、（６）指導書の作成と並行して、本プロジェクト関係者の事業遂行意欲を持続させ展開・発展させるため、筆者は、優秀な指導教師を対象とする「モンゴル国 IT 教育賞（Mongolian National and Innovative Award for IT Education）」（仮称）を 5 年生担当教員から 9 年生担当教員まで校種ごとに、そして、優秀な児童生徒を対象に「モンゴル国 IT 資格（Mongolian National Certificate of IT）」（仮称）を応用と基礎の 2 種に分けて、それぞれ 1 級から 5 級まで（1 級は 9 年生修了程度、2 級は 8 年生修了程度、3 級は 7 年生修了程度、4 級は 6 年生修了程度、5 級は 5 年生内容終了程度）付与する賞等を企画、制定することを提案し、カウンターパートのみならず関係者から、おおよその合意を得ている。特に前者は IT センターが将来的に「MS CTC（Microsoft Certified Training Education Center）」の仲間入りをするために有用であろうし、また、後者は、同じく世界的規模で実施されている MCP プログラム（Microsoft Certified Professional Program: マイクロソフト認定技術資格制度）へ発展的に接続させる第一段階の国内資格制度として、それぞれが教員と生徒の教授及び学習意欲向上のために、有効であると考えられる。実現可能な提言の一つとして、ここに付記する。

なおまた、モンゴル国滞在中に、教育研究所長であり筆者のかねてからの友人である Prof. Dr. Begz 氏及びモンゴル国ユネスコ教育担当官 Ms. Khulan とも個人的に面談し、彼らから本プロジェクトへの大きな期待が表明されていることも、付記するに値しよう。

以上

日程及び面談者等

日時	事項	内容及び面談者等
6月17日(土)	成田発ウランバートル着	
18日(日)	資料整理	
19日(月)	指導書内容と構成案協議(ITセンター、科学技術大学)	L. Choijoovanchig、L. Munkhtuya、G. Batnasan、Bayaruma、荻野、篠原=ITセンター Prof. URANBILEG TSERENJAV、Prof. Dr. NAMSRAI Yumbayar、Bayaruma、篠原=科学技術大学
20日(火)	指導書内容と構成案協議(ITセンター)	L. Munkhtuya、G. Batnasan、Bayaruma、荻野、篠原。なお、第一学校教諭とも面談。
21日(水) ~23日(金)	勉強会及び指導書内容、構成案等の協議(教育省内4階会議室)	理科、算数・数学、ITの各ワーキンググループメンバー
24日(土)	資料整理	
25日(日)	ウランバートル発成田着	